

## 五十一難曰

病有欲得温者、有欲得寒者、有欲得見人者、有不欲得見人者、而各不同、病在何藏府也。

然、病欲得寒、而欲見人者、病在府也。

病欲得温、而不欲得見人者、病在藏也。

何以言之。

府者陽也、陽病欲得寒、又欲見人。

藏者陰也、陰病欲得温、又欲閉戸獨處。

惡聞人聲、故以別知藏府之病也。

病みて温を得たい者が有り、寒を得たい者が有り、人にあいたい者が有り、人にあいたくない者が有る、しかるにそれぞれが不同、何の臓腑に病があるか。

然るに、

寒を得たがり、しかも人にあいたがるは、腑に病が存る也。

温を得たがり、しかも人にあいたがらないのは、臓に病が存る也。

何を以って言うか。

腑は陽也、陽病は寒を得たがり、しかも人にあいたがる。

臓は陰也、陰病を温を得たがり、又戸を閉めて独居を欲しがる、悪しむは人声を聞く。

故に以って別するを知るは臓腑の病なり。

腑の病 陽 寒 人

臓の病 陰 温 独

腑の病は陽とあります。

この陽は機能の亢進を意味します。亢進したことで体温が上昇し、その緩和として寒さを得たがります。またその機能の亢進から気分が高揚し、活動的な気持ちになるので人に会いたがるとなります。

臓の病は陰とあります。

この陰は機能の衰退を意味します。衰退したことで体温が低下し、その緩和として温かさを得たがります。またその機能の衰退は気分の沈滞を招き、何事にも億劫になり一人で居たがるようになるのです。

五十一難の腑臓の病は症状が正反でカップリングされているため、同元の病といえる。元が同じながら腑と臓という発症部位の性質の違いから、その症状が真逆となる。

## 五十二難曰

府藏發病。根本等不。

然。不等也。

其不等奈何。

然。藏病者。止而不移。其病不離其處。府病者。彷彿賁嚮。上下行流。居處無常。故以此知藏府根本不同也。

臟腑の発する病。根本は等か不か。

然るに。不等なり。

其の不等は何か。

然るに。臟病は。止りしかも移らず。その病はそのところを離れず。

腑病は。彷彿(ほうふつ；定まらず)し、賁嚮(ふんきょう；騒がしく)して。上下に行流し。居る所が常に無し。

故に以って此の臟腑の根本が不同であると知るなり。

五十二難は腑と臟の病み方の性質の違いです。

腑と臟は名前で分けられているくらいですから異なりがあります。この腑と臟の病の発し方の性質の違いを「根本等不」として、仮に同じ病邪であってもその病み方の違いを性質からの症状の違いと考えて、腑病か臟病かと分けられるという内容です。

五十一難も五十二難も症状記載があるために、その症状の分析から臟腑の病を知ろうとしてしまいます。しかし本来はこの臟腑というものはブラックボックスです。例えにあげられた症状を分析することで、臟腑の性質を論理解析して、その性質と病状をより把握することができます。

五十一難では腑は陽、臟は陰としていいますが、五十二難では陰陽の明記はありません。

陰陽というのは発せられた現象の分析ですので五十一難は症状の記載と考えられ、五十二難は五臟と六腑の性質を言っていると考えられます。

五臟はそれぞれの内容物がお互いを移動しあったりしません。定まった状態を維持し、人体生理の運営を行今す。それを「止而不移。不離其處」と言っています。仮に五臟のいずれかから病が発現しても他の臟には伝播しない問いうのが原則です。だから伝変という病状におちいれば、死病と診断されるのです。

そんな臟が病を受けての症状は「温まりたがり人に会いたがらない。」です。

臟病は人体生理の根源を乱すものであり、自律神経を乱してホメオスタシスを安定を脅かすものです。

体温の生産量は減り、生きていくための情報収集活動も疎ましくなって、人との交流を避けます。

六腑はそれぞれの腑の中を内容物が移動していきます。もしくはその内容物に関わっています。その様相を「彷彿賁嚮。上下行流。居處無常」と言っています。だから腑から発せられた病は六腑のそれぞれに動き回っても、死病とはなりません。

腑が病を受けての症状は「寒さを欲しがり人と会いたがる」です。

腑病は気候と飲食と心身の活動状況の不均衡です。それは自律神経の軽い不安定な状態です。

生体は状況の改善をするべく生理機能の更新を起こし、体温生産量を増やしてしまうので寒さを欲しがります。またその生理機能の更新から落ち着かない気分となって人と会いたくなり、落ち着かない気分の理由の解明などに奔走してしまいます。